

在朝鮮日本人画家加藤松林人の活動

——自筆履歷書をめぐって——

喜 多 恵 美 子

1. 序 論

植民地期に朝鮮に在住した日本人画家である加藤松林人は、朝鮮美術展覧会の無鑑査を経て参与（審査員）を歴任するなど、当時の朝鮮画壇において重要な位置を占める人物であり、これまでも李龜烈、金周英、姜致奇、黄ビンナ、姜健榮、黄正寿らの在朝鮮日本人画家研究の中でもしばしば言及されてきた¹。加藤は20歳の時に父親の仕事の都合で朝鮮に渡ることになり、そこで清水東雲に師事し日本画をはじめたという、いわば遅咲きの画家であるが、着々と成果をあげていき、朝鮮画壇において存在感のある画家となっていった。

1 在朝鮮日本人画家研究の代表的なものとしては、李龜烈（1992）「1910년 전후기에 내한했던 일본인 화가들」『근대 한국미술사의 연구』미진사；김주영（2000）「일제시대 재조선 일본인 화가연구-조선미술전람회 입선작가를 중심으로」서울대학교 대학원 미술사학과 석사논문；__、「재조선 일본인 화가와 식민지 화단의 관계 고찰」（2002）『美術史学研究』233-234 집；강민기（2004）「近代轉換期 韓国画壇의 日本画 유입과 수용-1870년대에서 1920년대까지」홍익대학교 대학원 미술사학과 박사학위논문；__（2007）「근대전환기 한국화단에의 日本画 유입과 한국화가들의 일본체험；1890년대부터 1910년대까지」『美術史学研究』253 집；__（2014）「근대 한일화가들의 교류」『한국근현대미술사학』vol. 27 姜健榮（2009）『近代朝鮮の絵画 日韓欧米の画家による』朱鳥社；황빛나（2012）「재조선 일본인 화가 구보다 텐난（久保田天南）과 朝鮮南画院」『美術史論壇』34 집.

また、近年連続して開催された『東京・ソウル・台北・長春一官展にみる近代美術』展（2014年、福岡アジア美術館他巡回）や『ふたたびの出会い 日韓近代美術家のまなざしー「朝鮮」で描く』（2015年、神奈川県立近代美術館葉山他巡回）などの展覧会においても在朝鮮日本人画家の活動が紹介されている。

帰国後の加藤については、その実績にもかかわらず「忘れられた画家」として扱われることが少なくなかった。しかしながら、実際には帰国後もさまざまな活動を展開しており、作品も多数残しているのである。また加藤は非常に筆まめでさまざまな記録文や記事を残している。本稿はそうした彼の活動を明らかにすべく、加藤自筆の履歴書（以下、「履歴書」とする）を新資料として紹介しつつ、その内容を検討していくものである。この「履歴書」は加藤個人の足跡のみならず、植民地期朝鮮画壇の様子を克明に記録した貴重な資料である。また、朝鮮からの日本人引揚者の生活史であると同時に、戦後日韓交流史としても解読可能である。

筆者は加藤画伯のご遺族のご協力により、この資料に接することができた²。筆者がご遺族のもとに調査にいったのは2012年の3月27日のことであった。本来はこの「履歴書」ではなく、加藤が残した400字詰め原稿用紙400枚をこえる遺稿『回想の半島画壇』を見せていただくのが目的であった³。そのときの調査において、当該原稿以外にもさまざまな資料を見せてくださったのだが、そのうちの一つがこの「履歴書」であった。しかしながら、このときの調査を形にすることができないまま、早くも5年が過ぎてしまった。自らの怠惰を恥じるとともに、ご遺族にもお詫びしたい。

『回想の半島画壇』については現在整理中であるが、まずは「履歴書」を通じて、これまでの研究で不確かであったいくつかの事項を明らかにしていきたい。

2. 加藤松林人自筆履歴書

第二章では、加藤の履歴書を全文掲載する。なお、カッコ内の西暦と年齢については、読者の便宜のために筆者が付け加えたものである。住所と年月日の数字については原文で漢数詞となっているものをアラビア数字に

2 ご遺族である小栗一成氏を訪問するにあたり姜健榮氏の助力を得た。ここに記して感謝の意を表す。

3 加藤松林人の遺稿『回想の半島画壇』は1952年4月3日に校了している。

改めた。筆者の力不足で解読不能な字は●で代替してある。誤字についても原文の通りとする。また、必要な個所に参考図版を提示しておく。

履歴書（写真1）

加藤松林人

記

原籍、徳島県、阿南市、内原町、中分、77番地

現住所、滋賀県、大津市、藤尾奥町、413-34（登記地番）

住居表示地番

藤尾奥町、21-4

加藤俊夫（雅号、松林人）（写真2）

明治31年（1898年）9月16日生

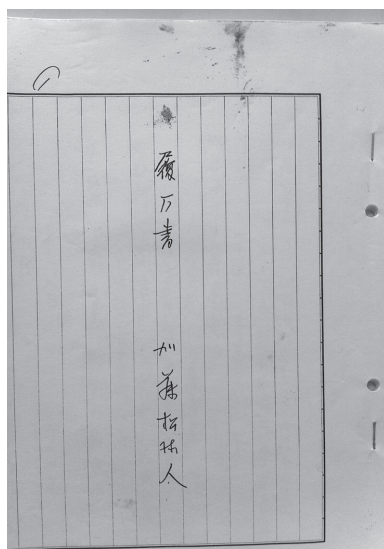


写真1



写真2

学歴

- 1、明治 38 年 (1905 年、7 歳)、4 月
阿南市、桑野村立桑野尋常高等小学校、一年入学
- 1、明治 43 年 (1910 年、12 歳)、3 月
右、小学校、六学年卒業、同時に同校高等科、一年に入学
- 1、明治 44 年 (1911 年、13 歳)、3 月
右、小学校、高等科一年終了、と同時に
- 1、同年 4 月
県立富岡中学、一年に入学
- 1、大正 4 年 (1915 年、17 歳)、7 月
右、富岡中学校、四年中退
- 1、同年、9 月
東京、私立早稲田大学、文学科予科入学
- 1、大正 6 年 (1917 年、19 歳)、9 月
右、早稲田大学、文学科予科終了

経歴

- 1、大正 6 年 (1917 年、19 歳)、8 月
長野県、松本市、元町、小林邦八 四女、なつ、と結婚
- 1、同年、11 月
母、妹、二人を連れ、一家をあげて、朝鮮に移住、父の許に赴く
- 1、大正 7 年 (1918 年、20 歳)、8 月
長男、良一、誕生
- 1、同年、11 月
右、長男、良一、死亡
- 1、大正 12 年 (1923 年、25 歳)、10 月
母、ミツヲ、朝鮮総督府病院に於て死亡、往年、46 才
- 1、昭和 4 年 (1929 年、31 歳)、6 月
妹、花実、朝鮮京城府、初音町に於て死亡、往年、18 才
- 1、昭和 7 年 (1932 年、35 歳)、9 月

父、安三、京城府光熙町に於て死亡、往年、55 才

1、昭和 20 年（1945 年、47 歳）、12 月

終戦により、朝鮮より引揚げ、郷里、阿南市内原町、父安三の実家、私には従兄にあたる柿内博記方に落ちつく

1、昭和 21 年（1946 年、48 歳）、1 月

朝鮮に於ての知人、笠崎基氏を訪ねて、愛媛県大三島、宮浦へ赴く、これはかねてより、右、笠崎氏と話し合いの結果、島に於て百貨店経営、小生、催し場を担当する筈であった。

1、同年、3 月

ところが新円切り替への為め、状勢変化、右の志を遂げず、大阪へ。東区、平野町、妹、●の婿、佐野正男方へ落ちつく

1、同年、5 月

大阪の最初の戦災住宅、関谷町に移る、同時に

1、同年、同月

大阪、生野区、猪飼野、3 丁目、朝鮮文化社（在日、朝鮮人子弟の為め、初等朝鮮語教科書、出版）へ、客員顧問として入社

1、同年、9 月

「ホテル、マツバラ」建設監督の為め、京都東山区、杉原通りの建設現場の離れ家に移る

1、昭和 22 年（1947 年、49 歳）、3 月

「祇園●●」開設の為め、京都、東山区四条通り、祇園北側の店舗予定地、二階に移る

1、昭和 23 年、5 月

京都、右京区、花園、妙心寺前、青野方、離れ家に移る

これより画業始まり、大阪、新世界新聞（諺文）客員入社、朝鮮風物スケッチと随筆記事を連載

爾来、日本にある朝鮮、韓国系の各新聞、雑誌などへの執筆をつづける

また妻、なつ、小生に代って、京都韓国学園の講師となり、美術を担当、爾来十ヶ年。ついで大阪、西成区、梅通り、韓国系の金剛学園に移

って、二十ヶ年、一昨、昭和 52 年 3 月、小生病気療養のため退職、本国
よりの感謝状と共に、記念品を贈られる。

1、昭和 24 年 (1949 年、51 歳)、6 月

京都、下京区、上烏羽唐戸町、廣瀬方の二階に移る

1、昭和 27 年 (1952 年、54 歳)、10 月

日韓親和会、創立に参加、機関誌「親和」発行に協力、爾来二十五ヶ
年、一昨年 12 月、一応の初期の目的を達したとしてひと先づ解散。目下、
有志をもって、別計画を考慮中

1、昭和 33 年 (1958 年、61 歳)、1 月

東京、神田猿樂町、駿河台下、韓国 YMCA、三階に部屋を借り、ここ
を東京での住居として三ヶ年後、これを中央線、吉祥寺に移す。

1、同年、8 月

知己相依り、小生、還暦記念として、戦後、各新聞雑誌などに連載し
たものを集め、さしえを添へて「朝鮮の美しさ」を出版 (写真 3)、同時
に池袋、西武百貨店に於てこの出版記念会と作品展覧会を開く

1、昭和 35 年 (1960 年、62 歳)、4 月

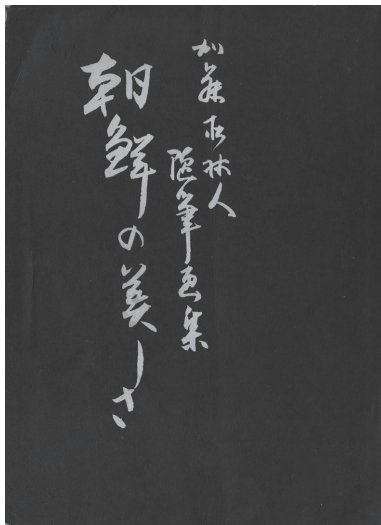


写真 3

滋賀県、大津市、藤尾奥町、のち現住の、京都、山科の奥、東海道線
逢坂山トンネル、京都疎水（琵琶湖からの）トンネルに挟まれた高台に
移る

1、昭和 37 年（1962 年、64 歳）、7 月

日本南画院、同人有志、また朝鮮に縁故のある有志作家の参加を得て、
「日韓美術連絡協議会」を作り、戦後、漸く往来が出来はじめた韓国画
家との連絡をはかる。

1、昭和 38 年（1963 年、65 歳）、8 月

さきに出版した「朝鮮の美しさ」が機縁となり、思いもかけず、戦後
初めての韓国政府、広報部の公式招待客として、8 月 15 日の光復節式
典に招かれ、朝日新聞全国版、NHK などによって採りあげられ、大げさ
に言へば、国賓第一号として紹介される。

十八年ぶりの韓国訪問、滞在、約一ヶ月、韓国各地を廻る。

1、昭和 39 年（1964 年、66 歳）、5 月

日本民芸協会（柳宗悦氏創設）の依頼により、前年、小生韓国訪問の
際、誕生成立を見た「韓国民芸協会」と連絡、打合せの為め韓国訪問、
その時も滞在約一ヶ月、済州島に渡り、また、朝鮮民芸研究の大先輩、
故、浅川巧氏の墓地の発見と修復をする

1、昭和 40 年（1965 年、67 歳）、7 月

右の結果「日本民芸美術館」「東京たくみ民芸店」主催により、東京三
越本店に於て、戦後初めての韓国民芸品展覧会を開く、一翌年、大阪に
於ても、

1、昭和 44 年（1969 年、71 歳）、8 月

国鉄、湖西線（北陸本線）建設の為め旧住所立ち退き、直ぐ近所の現
住に移る

1、昭和 45 年（1970 年、72 歳）、4 月

十数年に亙る東京での住居を閉じる

1、昭和 48 年（1973 年、75 歳）、6 月

有志知己の厚意と協力により、東京、WUM 本部、出版部より「韓国
の美しさ」出版。

それは先に出版した「朝鮮の美しさ」の上に、戦後、韓国訪問など二十数篇を加え、色刷りさしえなど入れたものである。

画歴

1、明治44年(1911年、13歳)、4月

中学にはいって、美術の担当は大分県出身、東京美校出の大塚昌可先生であった。(写真4)今から考えても仲々優れた先生で、真の写実ということを教えてくれたのは、その先生であったように思う。後この人は東京に出て、まだ原色写実の無かった時代、写真の色づけに成功、印刷界に活躍したと聞いている。

1、大正4年(1915年、17歳)、9月

早稲田大学文学科予科在籍中、傍ら谷中にあった太平洋洋画研究所に一ヶ年近く通い、デッサン、油彩の初歩を学ぶ。

1、大正9年(1920年、22歳)、3月

朝鮮京城に於て、清水東雲先生の門を叩く。

その人、明治2、30年代、京都画壇に於て、軽妙な風俗人物画を以って知られていた、清水東陽先生の養子となったのであるが、当時、やはり四条派で知られていた森寛斎の門下で山本春挙(一明治末から大正時代かけて竹内栖鳳と並び称された京都画壇の大御所)と同門であった。



写真4

当時の京都画壇は、明治維新以後、最も衰微していた時代であって、画家の殆どは、友禅の仕事によって生活を支えていたといわれ、それに飽き足りない作家は、諸国遊歴と称し、各地で画会、頒布会など催して歩いたという。

東雲先生も各地を歩き、後、台湾に渡り、ついで、明治40年、日韓合併となるや朝鮮に移り、此处で印刷会社の顧問となるに及んで、その縁故により、此处を永住の地に定めたという。清水先生からは画室の表札を見て、いきなり飛び込み、日本画というものをやって見たいという当突な私の希望を面倒がりもせず、それでは、まづこんなものでも稽古してみて御覧、といって、墨絵の蘭の手本を描いて渡してくれたのを初めとして、その後の数々の指導については、到底、此处では書ききれないから割愛するが、ただ、今もって日々の仕事の間で時々先生のことを想い出すのは、日本画の材料、絵の具についての知識というか、理解というか一筆、墨、絵の具、紙、絵絹などの種類はもとより、その性質、扱いかた、癖のいろいろは勿論、更に梓であるとか、假張りであるとか、普通は表具屋さんの仕事の領分にわたること、また金銀箔、金銀泥、から胡粉の膠の扱い方など、絵の具やさんの領分のこと、その上、日本画の材料で描く画は、何年ぐらい経てば、どの位の時代色がつくか、ということ、その場合の絵の具の塗り方の厚さ、薄さなど、ほんとうに何から何まで話して頂き、時々、今もってそのおりの面影が泛んでくる。勿論、言うまでもなく私の方から少しでも疑問が起り、気につくことがあると、すぐ先生の所へ行って訊ねてみる、ということを繰り返したことも困るであろうが、とにかく、その、こまやかな親切は忘れられない。

昭和4年、6月、当時の京城府大和町3丁目旧老人亭下の寓居で亡くなられた。

1、昭和（大正）11年（1922年、24歳）、5月

朝鮮美術展覽会（^{マダ}鮮展）が総督府主催によって開設されたのは、この年、5月からであった。それよりさき、日本内地に於ては、明治41年、文部省主催の美術展覽会（文展）が開設され、それが十二回で終わると、

ついで帝国美術院の主催、の帝展となっていた。

当時の日本画壇は、帝展の他に、日本美術院（院展、日本画、彫刻）、二科会（洋画彫刻）春陽会（洋画）、国画創作協会（日本画）などの団体展があり、この時期に、政府主催の美術展覧会という意味から鮮展開催はいろいろ論議を呼んだが、大正八年の万才騒動の後でもあり、時の齋藤総督の平和政策という意味もあり、後に、台湾そして満洲にも出来たのであった。

鮮展は大体帝展に準じ、ただ朝鮮の事情を加味して、日本画、洋画、彫刻の他に、朝鮮という事情を加味して、書道を加え、二、三、褒状の三階級の賞があった。

審査員は日本から呼び、各部一人、朝鮮側からは適当な人があれば各部にということであったが、初期の時代に、李朝時代生き残りの老人、東洋画部、書道部、各一、二人、それに洋画の高木背水氏が一、二回出た。

最初の日本画（それを東洋画といった）審査員は川合玉堂先生であり、東洋画の出品総数は、四君子などの簡単な墨画を加えて、三百数十点、そして入選は百点余りであった。

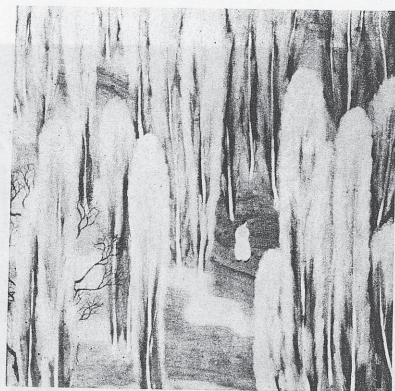
授賞の結果は、宇野逸雲の「緑陰一憩」と許穀斎の山水が二等賞、その他、三等賞、三、四点、褒状など、合計七、八点であった。

私は二尺五寸巾、二尺くらいの小さい作品二点（●。冬風景、今はそれらの写真も手許にない）（写真5）で幸い二点共入選したが、誰れもが展覧会への出品など、特に朝鮮側の作家には初めての経験であるから、非常に迷ったようであった。

二十才から五十才まで、三十年、朝鮮に住んでいた思い出にと考え、日本の歳時記風に、かの地の四季おりおりの行事や風習、それに殆ど歩きつくした、かの地の山水風景などの手記一先きに出版した「朝鮮の美しさ」の底本になった手記と、朝鮮で画聖といわれる檀園の描いた犬の画、一それは、ブルドックのような犬が伏せている凄い程写真実風な作品であって、合併中は日本の国宝にも指定されていたものであるが、その写真が洋風画の影響を受けたということが通説となっていたのであるが⁴、

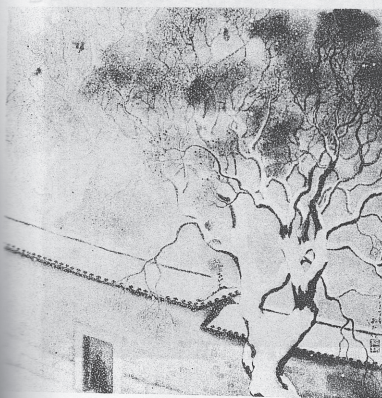
4 関野貞博士の朝鮮美術史など（加藤の付記）

落 搖 江 秋



林 松 藤 加

暮 夕 の 冬



林 松 藤 加

(18) 111

それに対して私が、あるいは洋風画の影響であるかもしれないが、どうも私の見るところ、考えるところ、どうもこの写実は、東洋画の肖像画の写実の手法、あくまでも実物に肉迫するという、東洋本来の写実であるのではなかろうか、という一乃ち檀園は、本来、李朝の画院つまり、王様を初めとして、貴族や学者などの肖像を描くのが仕事であったことなど一をあげ、私の朝鮮絵画に対する見解をまとめたもの、それと、朝鮮美術展を中心とした、日韓合併の前後から、終戦迄の約四十年近い間の、美術界の情勢を、つとめて詳細に記した「回想の半島画壇」という各々千枚近い、三つの原稿を引揚げ直後にまとめておいた。幸にして行事や風習、また山水風景については、新聞雑誌に載せたこともあり、題名を替え、「韓国の美しさ」となって本になったが(写真6)、他の二つは、どうしても一般向とは言えないのでどのようになることか――

1、大正12年(1923年、25歳)、5月

鮮展の第二回には、審査員に小室翠雲先生が見え、三戸萬象の「権域北壁」六曲一双の屏風の大作が二等賞となり、私の作品「黒扇」(三尺巾

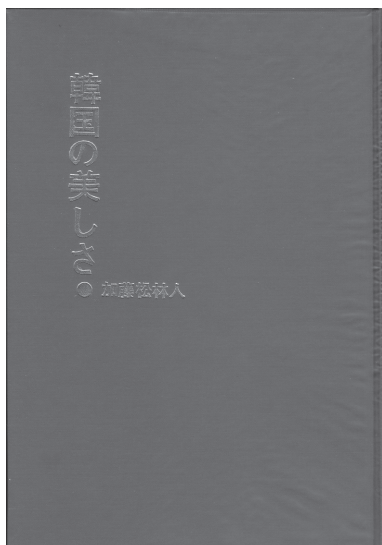


写真6

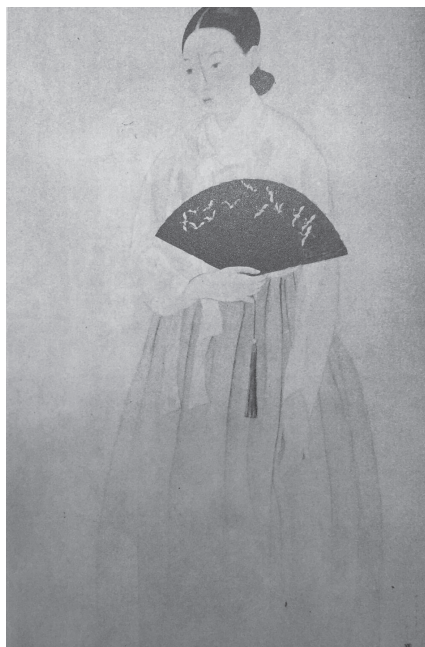


写真7



写真8

丈五尺) 白衣の朝鮮婦人が、立って胸のあたりに黒い扇子を開いているポーズが三等賞、宮内省御買上げになった(写真7)。

値段は確か百円くらいであったが、ともかく、これが私にとって非常な転機となり、其れ迄は碁を打ってみたり、短歌の雑誌に熱中してみたり(今もある短歌雑誌、何百号という年月を重ねている『ポトナム』は、その当時、小泉琴三君を中心に同志で始めたもの)(写真8) そうかと思うと毎日毎日、京城近郊のあらゆる山や川、小さな部落、山腹に喰つついたような寺や庵、また旧市街の狭い通りの小路の隅々に至るまで、スケッチブック片手に歩き廻るということを止め、本気で画一本でやる気になったようである。

1、大正13年(1924年、26歳)、5月

第三回展には結城素明先生が審査に見え、大正14年の第四回展は平福百穂先生であったが、その時は非常な厳選といってもよく、いつもは百点余りの入選を見るのであったが、七十一、二点のうち、特に墨画の



写真9

蘭竹の類はホンの二、三点であった。そして、二等賞はなく私の「卓上静物」(二尺五寸巾二尺)が三等主席となって(写真9)、また宮内省御買上げとなり、審査員歓迎会の席上、先生に紹介され、親しく作品の批評を頂き、良かったと言われた時は心から感激した。

平福先生はかねて短歌の方でもよく知り憧憬している先生、それにその頃帝展出品の「豫讓」「荒磯」など、かずかずの作品も実物で或いは写真でよく見ており、それに先生の丸形のふっくらした顔とテーブルの上に重ねた双手のふっくらした豊かな感じ—

修業勉強するものにとっては、いつも叱咤激励を受けるだけでは、その努力が続かないことがある。そのような時、先生のような温顔な風貌に接すると、却って勇氣百倍、しみじみとした決意が湧いてくる。

大正五年、五月、第五回展はまた結城素明先生であったが、そのよう

にして終末、第二十三回展までの間には、日本画壇の殆どの大家先輩が顔を見せ、古くは池上秀畝、松林桂月、矢澤弦月など、川崎小虎、荒木十畝、伊東深水、それに院展の前田青邨、また速水御舟、それから京都の橋本関雪、入江波光などの諸先生は、私自身にとって、大小いろいろな思い出を残されて行った方々であるが、

特に第十六回展以後は、私も「参与」として審査に立ち会うことになったので、その思い出にも一層深いものがあり、春の五月は毎年、展覧会に始まり展覧会に暮れるという有様であった。

なおこの年、大正十五年、十月、第七回帝展に鮮展の東洋画部から金殷鎬（以堂）が入選した。以堂君は已にこの一、二年前から東京に出て、結城素明先生に師事しており、この時もまだ東京に居た。そして

1、昭和2年（1927年、29歳）、10月

第八回帝展に私の「晩秋の関帝廟」が初めて入選し（写真10）、以堂君の婦人像もつづいて入選（写真11）、鮮展日本画部から二人の入選者



写真 10



写真 11

が出たわけであった。帝展の会場で結城先生のお目にかかった折り、良かったなあ、これで漸く朝鮮も一人前になったなあ、と、とても喜んで祝っていただいた。

1、昭和5年（1930年、32歳）、5月

東京での「聖徳太子奉讃展」に私の「池畔紅葉」が入選し、これは後、ドイツにも持って行くと聞いている。そして

1、同年、10月

第十一回帝展に私の「秋山騎旅」が入選（写真12）、このようにしてこの前後には各種の日本内地展に屢々出品、入選して、東京画壇にも漸く馴染みが出来始めたのであるが、



写真 12

この年、夏以来、毎日新聞主催による、朝鮮八景、八勝の募集という人気投票があり、その決定を見るや、朝鮮の代表作家八人（東洋画、洋画四人づつ）に一景一勝が割り当てられ、わたしは南鮮の智異山と北の朱乙温泉が当たったのであった。

展覧会は翌年春ということであったから、それでは北の朱乙温泉の写生を先きにと、十一月の末に出発したのであったが、汽車のスチームが消えて風邪気味となり、朱乙にも寄らずに清津まで直行、そこの旅館で遂に寝込んでしまって、とうとう年末まで其所に滞在、暮れ近く、医者に連れられて京城の自宅に帰ったのであるが、それからまた、二月の末まで自宅で療養した。水のないロクマクであった。

この年、ちょうど、かの二二六事件の時であって、こうしていると何もかも昨日のように想い出されて来る。

この時以後、大作はやめ、また日本内地への出品も一切中止、朝鮮での製作に専念することにした。

1、昭和 19 年 (1944 年、46 歳)、5 月

その春、第二十三回展をもって鮮展は終わったのであるが、ついでにも少し補足しておきたい。

まづ、第十回展の時に機構改革があつて、「書道部」がなくなり、代りに「工芸部」が出来た、また二等三等などの賞もなくなり、すべて特選となり、翌年は無鑑査待遇、ついで、第十三回展から推薦の制度が出来、永久無鑑査の待遇を受けることになった。東洋画、洋画三、四名づつ、彫刻、工芸は一、二点づつであつた。そして、ついで第十六回展から「参与」の制度が出来、鮮展も初めて、出品者が審査にに加わるという、縦の筋が出来たというわけであつた。

1、美術団体その他

また私は、朝鮮美術展開設以後、終戦に至る二十三年間、朝鮮内での各種美術団体、また協議会などの設立、運営などに関与し、

1、著述、寄稿

「朝鮮金剛山探勝案内」「朝鮮美術風土記」その他新聞雑誌などへの寄稿も多数でかぞえきれない。

1、事業

昭和 17 年 (1942 年、44 歳)、3 月

戦争が永びくにつれ画描きといえどもただ筆なめてばかりもと考え、朝鮮忠清南道、論山郡、上月面に於て、十一万余坪の山畑を手に入れ、此処に午前は筆採り、午後、鋤をもつという、農業実践、美術道場を計画し、その開設工事殆ど完成間近に至って終戦、抛棄引揚げに至る

1、昭和 20 年 (1945 年、47 歳)、12 月

引揚げ後、聊か感ずるところあつて、画壇活動は殆ど隠退の如き形であるが、画業研鑽は怠らず、此頃は、手馴れてなつかしい朝鮮風物を描くのほか、

1、昭和40年(1965年、66歳)

の頃からは、専ら、多くの人々から見過され、忘れられた美しさ一例
えば路傍の石仏、社頭の石段、小流れのほとりなど、何気ない小さな風
景に心惹かれ、京都、大和などよりは更に古い近江の琵琶湖の奥や、ま
た近年は、度々九州の国東半島、臼杵、日田の奥などへ出かけており、
小鹿田皿山、耶馬溪などへも出かけ、小倉、門司、福岡などにも知己が
出来つつある。

1、昭和54年、7月20日(1979年、81歳)

右

加藤松林人 印

3. 加藤松林人の画歴

既存の研究において、加藤は朝鮮に渡って清水東雲の門下生となったと
いうことのみ、注目されてきた。「履歴書」では、清水の画室の表札を見て
飛び込んだとあるが、誰の紹介もうけずにやってきた加藤を清水はたいへ
ん親切に指導している。そもそも、清水の画塾に通おうとしたのはもともと
と美術に対する関心があったからであり、そのきっかけとなっているのが
徳島の富岡中学校時代に出会った大東昌可であった。履歴書では「大塚」
とあるが正しくは「大東」である。

大東昌可は1902年に東京美術学校西洋画科を卒業、白馬会に〈秋景色〉
などの作品を出品した西洋画家である(写真4)。富岡中学校では美術教育
に力を注ぎ、徳島で最初の洋画展である「紅燈会」展を1912年11月に開
いてもいる。加藤は大東の指導を高く評価しており、「真の写実」がどう
いうものかを教えてくれたという。その後、加藤は早稲田大学予科時代に
太平洋画研究所に一年ばかり通ったということからも、彼の画歴が日本画
ではなくむしろ西洋画からはじまっているという点が注目される。

「履歴書」においては、大東昌可について「まだ原色写実の無かった時代、
写真の色つけに成功、印刷界に活躍したと聞いている」と記述されている

が、実際には東京で日本における写真修整の大家となり、『大東写真修整術』（東京写真専門学校出版部、1931年）などの著書も刊行している⁵。ちなみに大東の息子の大東元も朝日新聞社所属の報道写真家として名が知られている。

加藤の作品は、風俗画を除いては風景や建物を描いたものが多いのであるが、伝統的な三遠法をとらず、まるでカメラを構えたかのような構図をとることが少なくなかった⁶。このように最初の美術指導を写真と写真に関心の深い西洋画家からうけたということは、加藤の構図把握との関係性が見えるようで意味深い。このような加藤の画歴を考えると、初期の作品に見られる、没骨というには濃厚な彩色がなされた作品がどのようにして成り立ったのかが理解できる。ともかく、朝鮮に渡る以前から美術に関心があったということは加藤の画業を考えるうえで、無視できない事実である。

加藤が清水東雲門下に入ったのはほぼ偶然だったようだが、清水の親切な人柄によって丁寧な指導を受けたことは加藤にとっては幸運だったといえる。門下に入って二年後の1922年に朝鮮美術展覧会が開催されたが、加藤もそこに出品し、入選を果たすにいたっている⁷。初期の朝鮮美術展覧会の出品作は水準が低いということが問題視されていたが、だとしても、わずか二年で官展に入選したということは大したものであり、これは加藤が中学時代から美術への関心を持続してきたことと無関係ではなさそうだ。加藤の眼から見た清水はきちんと絵画の修業をうけてきた信頼のできる人柄であったようだ。

帰国直後に加藤が書き記した回顧録『回想の半島画壇』によると、清水

5 大東は大正8年（1919年）から東京の郁文館中学で勤務している。金子一夫（2013）「大正・昭和戦前期全国中等学校図画教員の総覧的研究（3）：東京府内私立中学校」『茨城大学教育学部紀要』茨城大学教育学部。

6 기다에미코 (2010) 「재조선 일본인 화가에 대한 편견을 지우자」『플랫폼』1.2월호 pp. 50-53. ただし、このタイトルは編集者がつけたものであり、筆者の意図とは少し異なる。

7 〈秋江揺落〉〈冬の夕暮れ〉の二点が入賞している。

は朝鮮人の文人や画家との交流も多く、機会を設けては親睦を深めようとしたという⁸。これに対して、山本梅涯は京城在住当時、在留画家ともあまり親しまず、朝鮮人画家とも交流がなかったというから在朝鮮日本人画家といえども各人各様であったようだ⁹。

また、以下のような記述がある。「清水氏が森寛斉の門にいた青年時代は、ちょうど日本画壇も前期文展の開設前であり、京都の青年画家たちの多くはなかなか生活に苦労していたらしく、友禅染めの下絵や輸出物の屏風のことなど、いろいろ当時の仕事についての話を聞いたことがある。氏は、何んとしてもそれらの内職がいやなので、そのうち地方の遊歴をはじめて台湾に渡り、日露戦争の後の京城に移り、当時、京城の明治町の角にあった朝鮮印刷会社の依頼で、印刷の下絵などを描いているうちに、いつの間にか住みついてしまったということである。」¹⁰

京都画壇の衰退と青年画家たちの内職との関係についての言及については、産業史の一端としてみても興味深い内容である。また、画家の地方遊歴については当時、かなり多く行われていたようであり、その行程が日本国内にとどまらず、台湾や中国、朝鮮にも広がっていったことが、一部の在朝鮮日本人画家を生み出したというわけである。加藤は日本画壇から忘

8 「(清水は) その人柄とともに、当時、画家らしい画家として多くの交友を持ち、特に朝鮮人側の作家や文人たちとの往来も深かった。後に述べる丹青同好会を計画したのははじめとし、何かと機会を作っては朝鮮人側作家を引っぱり出し、所謂の内鮮親睦を言葉だけでなく実践しようとした人であった。合併前後の古い画家たちの情思や生活について、いろいろと私の好奇心を満足させて頂いたのも先生であり、今にしておもえば、もっともっと聴いておきたいことが多かったのである。」(加藤松林人『回想の半島画壇』、p. 55。)日本人画家と朝鮮人画家は書画会などを通じて交したが、その様子も『回想の半島画壇』に描写されている。こうした内容も今後、整理ができ次第発表していきたい。

9 「大正八九年の頃、何かの集まりで一二度お会いした記憶はあるが、その時も早く帰られ、その後は集会などには殆んど出て来なかったもので、話をするような機会は遂になかった。はじめから在留の画家たちとの交遊はあまりなかったらしく、むしろ朝鮮人側の作家とも往来はなかったという。」(加藤『回想の半島画壇』前掲書、p. 58。)

10 加藤『回想の半島画壇』、p. 54。

れられた存在であったというのがこれまでの見方であったが、日本の美術界との関係性についてはもう少し細かく見ていく必要があるようだ。加藤が日本の画壇とのつながりを持ったのは、朝鮮美術展覧会の審査員として朝鮮を訪れた画家たちとの出会いが最初である。「履歴書」にも川合玉堂や小室翠雲、平福百穂らの名前が見られる。加藤の画業のうえて大きな転機となったのは、第二回朝鮮美術展覧会における出品作〈黒扇〉の三等入選と宮内庁買い上げであった。これを契機に絵一本で生きようと決心したというのである。この時、加藤は25歳であった。日本人審査員としては第三回朝鮮美展で直々に激励の言葉をかけてくれた結城素明の存在も大きかったようだ。結城は、以堂金殷鎬の日本留学時代の師であり、第八回帝國美術院展において金殷鎬と加藤が入選した折も、「良かったなあ、これで漸く朝鮮も一人前になったなあ」と喜んだとあるが、結城は朝鮮在住の画家たちに常に関心をはらい、応援していたようである。加藤が29の年であった。

もし、加藤が日本国内で画歴を積んでいたならば、経歴わずか数年の若者が日本画壇の中心人物と言葉を交わすことなど、不可能に近かったであろう。朝鮮にやってきた審査員たちの眼には、若い加藤はそのまま萌芽期にある朝鮮画壇の象徴として映ったのかもしれない。第四回展の審査員であった平福百穂もまた画壇の重鎮であるにもかかわらず、決して威張らず、植民地朝鮮の青年画家に対して温かな態度をとったことが、加藤の記述からわかる。

日本では青年画家たちが食べていけず苦勞していた状況と考え合わせると、加藤が朝鮮在住という特殊性によって大きなチャンスをつかむことができたという事実は無視できない。ただその分、朝鮮で描くことに対する使命感のようなものが加藤を動かしていた点にも注目しておきたい。加藤は朝鮮半島の山河の美しさを讃え、描き、絵画だけでなく文章も多数残した。そうした仕事の集大成として帰国後、画家の還暦を記念して出版されたのが『朝鮮の美しさ』であった¹¹。また、先述した『回想の半島画壇』

の導入部分には朝鮮時代の絵画史がまとめられている。この部分については、関野貞の『朝鮮美術史』を念頭におきつつも、朝鮮美術を画家の立場から朝鮮の美術を正当に評価しようとしたものであるといつてよい。

さて、加藤が日本に帰国した後、ほとんど画壇で評価されなかった点については、これまでも指摘されてきた。筆者もその原因を日本画壇の排他的な画派の存在に求めたことがある¹²。しかしながら、「履歴書」を見ると、日本画壇はそこまで閉鎖的なわけではなく、朝鮮在住の画家たちにたいして、むしろ好意的で協力的な画家もいたことがわかる。また、朝鮮在住の画家たちが日本画壇で認められるためには、日本国内の官展や公募展で入賞することが必須であったことも見えてきた。そのことは「内地」展と「外地」展の間に厳然たる格差が存在したということを物語ってはいるが、逆に「外地」出身の画家であっても、「内地」で認められたら活躍のチャンスはあったということでもある。

加藤の場合、初期には積極的に日本の展覧会に出品をしていたが、途中、健康上の問題から日本への出展や大型作品の制作を断念したという。加藤が健康を害する原因となったのは寒冷期の朱乙温泉への踏査であったが、この踏査は「毎日新聞社」主催の『朝鮮八景』の風景画制作依頼に応じたものだった。『朝鮮八景』とは、1927年に毎日新聞社が主催して好評を博した『日本八景』選定の朝鮮版とも言えるものだ。『朝鮮八景』の選定は1927年に『京城日日新聞』が鉄道省の後援によって主催したものが最初であり、その後、大阪毎日新聞社や雑誌『三千里』の主催によって、数回行われている。「履歴書」によると、1930年に大阪毎日新聞社が『朝鮮八景』を選定したとあるが、これは1935年のあやまりである可能性が高い。その理由としては、大阪毎日新聞社主催の『朝鮮八景』選定は実際には1935年に行われていること¹³、1927年度に『朝鮮八景』に指定されたのは、長壽山、俗離山、周王山、無等山赤壁、統軍亭、牡丹台、扶余、朱乙温泉で

11 加藤松林人(1958)『朝鮮の美しさ』加藤松林人作品頒布会。

12 기타에미코(2010)。

あったが¹⁴、加藤は「智異山」と「朱乙温泉」を担当したといっており、選定地もあっていない。1935年の大阪毎日新聞社主催の『朝鮮八景』選定では八景八勝が選定されているが、その中には智異山が含まれているのである¹⁵。決定的なのは、加藤が病気を得た年に二二六事件があったという記述である。したがって、1930年に病気を得たのではなく、1935年から1936年にかけて『朝鮮八景』の踏査を行い、体調を崩したと見るのが妥当だろう。

当時の『日本八景』選定が熱狂的なブームとなったことは周知の事実であるのだが、その延長線上にある『朝鮮八景』選定とそれにかかわる作品制作と展覧会出品が意味するものは、加藤が「国民的」行事に関わる代表作家として認められたということであった。1935年は第14回朝鮮美展で加藤が永久無鑑査となった年でもあり、ここが加藤にとって画業のひとつのピークであったことがみてとれる。しかしながら、この時期を前後として、日本への作品発表を断念することになったというのは皮肉な話であった。1936年以降、加藤は朝鮮での活動に専念し、1937年、第16回朝鮮美展では参与（審査員）の地位についたが、日本での作品発表は日本帰国後の1947年まで約11年間行わなかったということになる。

4. 画業以外の活動

履歴書にもあるように、加藤が本格的に画業一本でやっていこうと決心したのは1923年のことであったが、それ以前は趣味生活の一端として、

13 米家泰作（2016）「昭和10年の「朝鮮八景」選定とコロニアル・ツーリズム」2016年度日本地理学会春季学術大会要旨、公益社団法人日本地理学会、2016年4月8日。

14 1927年開催の『朝鮮八景』選定については、以下の論文も参照のこと。홍영미（2012）「1920年代 八景 選定 미디어 이벤트와帝國意識의 擴散：日本・臺灣・朝鮮을 중심으로」경희대학교대학원 사학과 석사논문。

15 1935年における『朝鮮八景』選定で選ばれた八景は、濟州島漢拏山、赴戰高原、智異山、俗離山、慶州仏国寺、内蔵山白羊山、扶余、閑麗水道、八勝は海印寺溪谷、辺山半島、朱乙温泉、牡丹台、東萊海雲台、統軍亭、夢金浦、妙高山。米家、前掲資料。

短歌を詠んだり、あちこちでスケッチをしてまわったりしていたようだ。

加藤が短歌を投稿していた雑誌『ポトナム』は小泉茅三が1922年朝鮮在住中に創刊したものであるが¹⁶、現在も日本で同人活動が継続されている。『ポトナム』とは小泉の句のなかで「白楊」の字があてられているため、머드나무のことを表していると思われる。別の短歌の中では「白楊」に「ポプラ」という読み仮名がふられている¹⁷。つまり、創立当初の『ポトナム』は朝鮮という場所性が強く意識された結社であった。小泉は「野に立ちて」という一文の中で以下のように記述している。「(白楊の直ぐ立つ枝は) 澄み徹った冬空に高くひろげて居り、松の間から赫土の断崖や山壁などの、判然見える低山性の山脈には、弱い冬の日光が、微妙な無限に似た輝き(をみせている)」¹⁸。当時、朝鮮にやってきた日本人に強い印象を残したのが朝鮮の青い空と「赫土」であったが、ここではそうした土壤が生み出す景観について、冬でも湿度の高い日本の気候とはまったくことなる爽快な朝鮮の空気や、そうした気候に育まれる植物の代表としてポプラが描写されている。

小泉は加藤よりも4歳年上であり、京城では金魚の養殖に手を染めたが失敗し、教員をしていた。当時、在朝鮮日本人たちが文化活動などを通じて、お互い交流があったということだが、加藤が絵画だけでなく文学活動にも関心を抱いていたことは注目すべきであろう。加藤は、第四回朝鮮美

16 小泉茅三、本名小泉藤造。1894年、横浜で茶舗の長男として生まれる。神奈川県立第一中学校の卒業の頃、尾上柴舟が主催する短歌結社である車前草社に入会。東洋大学卒業後、東京で金魚の養殖をはじめが、津波により失敗。1922年に京城にわたり、京城高等女学校で教員をすかたわら、百瀬千尋と「ポトナム短歌会」創立。その後、帰国。関西学院大学教授などを歴任し、1956年没。(安森敏隆、上田博編(2008)『ポトナムの歌人』晃洋書房、pp.1-3。)「ポトナム短歌会」の活動は日本でも継続され、小泉の死後、現在も活動中である。

17 「白楊(ポトナム)の直ぐ立つ枝はひそかなりひととき明き夕べの丘に」『夕潮』(水甕社、1922年8月)。「うつつなく吹きゆく風の見ゆるかも庭につづける白楊の垣に」(『ポトナム』創刊号、1922年)

18 安森・上田、前掲書、p.6。

術展覧会の審査員であった平福百穂について画家であると同時にアララギ派の歌人であるという点において、相当の親近感を抱いていたようである。『回想の半島画壇』においても、加藤は「(自分には) ともすれば文人、漢詩の趣味がこびりつき残っているのであるが、例えば、その唐の時代の西園雅集とか前後赤壁とか、何とか九曲というような古い文人画家たちの風雅や感懐に心惹かれる」¹⁹ と文人趣味への憧憬を述べており、詩を理解することの重要性をはっきりと意識している。このことは加藤が朝鮮の画家たちを理解するうえでのひとつの指針となっていたように思える。朝鮮における文人墨客のありようは、日本における「文人」の歴史的文脈とはまったく異なるものを持っていることについては、筆者も以前考察したことがある²⁰。加藤はむしろ朝鮮風の文人のありかたに近い立場をとっていたように見える。最近の研究において、加藤が美術家と歌人が参加する総合芸術雑誌『朝』ならびに『ゲラ』の発刊に関わっていたことが確認されており、在朝鮮日本人芸術家たちの交流の様相が立体的に見えてくるようになった²¹。

加藤は執筆活動についても意欲的であったことから、少なからぬ新聞雑誌に記事を發表することになったし、帰国直後に朝鮮画壇についての詳細な記録を残すことにつながったのであるが、これらの活動は、個人的な承認欲求を満足させることよりも、むしろ、社会的責任がその根底にあるように思われる。朝鮮に住んだ者として、朝鮮の山河や人々の暮らしの中に見られる美しさを作品や文章で伝えようとする努力と、理解されにくい朝鮮の美術状況についてもわざわざ古代からの絵画史をまとめるということをして啓蒙的活動も行っている。

19 加藤、『回想の半島画壇』、p. 81。

20 喜多恵美子 (2010) 「朝鮮美術展覧会と朝鮮における「美術」受容」『帝国と美術』、国書刊行会。

21 辻 (川瀬) 千春 (2016) 「植民地期朝鮮における創作版画の展開 (2) —京城における日本人の活動と「朝鮮創作版画会」の顛末—」『名古屋大学博物館報告』No. 31、p. 32。

画業以外の加藤の活動としては、朝鮮で農業試験場と美術道場を計画していたが、実現はされなかった。帰国直後の加藤は百貨店（今でいう小型スーパーのようなものだろう）の経営に手を染めたり、新聞雑誌の顧問を務めたり、ホテルの建設監督をするなど仕事を選ばず働いている。戦後の困難な状況のなかではそれがごく自然なことであつたし、それ以上に「内地」に基盤のない引揚者が縁者をたよって転々とするのは当時としてはそれほど珍しくなかったと思われる。

ここで注目すべきなのは、画業を再開するきっかけとなったのが『新世界新聞』という在日朝鮮人が発行していた朝鮮語新聞であつたということだ。加藤はここに客員入社して、挿絵などを描いたという。『新世界新聞』は大阪で戦後創業された在日朝鮮人の経営による小さな新興新聞社である。小説家の司馬遼太郎が戦地から復員してこの新聞社に1945年末から数か月間在籍していたことがわかっている。司馬の弁によると、「戦後に簇生したアブクのような曖昧資本の新聞」であり、在日朝鮮人の集住地区である大阪市生野区猪飼野に位置した、木造二階建ての民家のような社屋であつたそう²²。

紙不足の時期にこうした新興新聞が勃興したのは、GHQが日本における言論統制の一環として、大新聞に圧力をかける一方で新興新聞を優遇したからであつた²³。司馬はここで新聞製作にかかわるテクニックを一通り身に着けたというが、朝鮮人が経営する新聞社で帰国した日本人が採用され、そこに活動の場が与えられたことはたいへんに興味深い。しかも、この『新世界新聞』は日本語版と朝鮮語版の二種類があるのだが、加藤は主に朝鮮語版に作品を発表しているのである。在日朝鮮人が見たくても見ることのできなわない「故郷」の山河を、長年にわたって朝鮮に住んだ日本人画家が描き伝えたということになる。

在日朝鮮人と加藤との関係についてはこれまでもたびたび言及されてき

22 産経新聞社（2013）『新聞記者司馬遼太郎』文春文庫、pp. 3-33。

23 産経新聞社、前掲書、p. 32。

たが、ここで一度、整理をしておこう。1946年5月、加藤は大阪の「朝鮮文化社」で客員顧問となり、在日朝鮮人子弟のための朝鮮語教科書を発行したとある。その次には『新世界新聞』の客員社員となり、以後、日本における朝鮮・韓国系の新聞雑誌に多数執筆したとある。また、在日朝鮮人子弟の通う京都韓国学園（現、京都国際学園）で美術を指導し、その後、やはり在日朝鮮人子弟の通う大阪の金剛学園で教鞭をとり、79歳まで勤めた。勤務していた学校にも加藤は作品を寄贈しているが、在日朝鮮人のなかには個人的に加藤の作品をコレクションしている者もいた²⁴。韓国・朝鮮系の雑誌新聞への執筆については、ここでは深く立ち入らない。

このように在日朝鮮人との関連が深まったのは、「大阪 関谷町」²⁵の戦災住宅に引っ越したことが大きいだろう。関谷町から在日朝鮮人の集住地域である鶴橋や猪飼野は比較的近距离に位置しており、朝鮮の食材を売る闇市もあったため、朝鮮帰りの加藤にとっては親近感を感じる場所であったと推測される。加藤は、東京での活動を模索するために、1958年に東京神田の在日本韓国YMCAの三階をもうひとつの拠点としたが、ここは1906年の創立以来、1919年の二・八独立宣言文がここで起草されるなど、在日朝鮮人の運動拠点であった場所でもあった。

このように戦後の加藤の活動の要所要所で在日朝鮮人の助力があったことが想像されるのであるが、加藤が在日朝鮮人と親しく交流したのは、彼が朝鮮や朝鮮人に愛着を持っていただけにとどまらず、朝鮮にも日本にも居場所を喪失した引揚者としての自らの立場と、日本の植民地支配と敗戦によって故郷喪失者となってしまった在日朝鮮人との間に一種の共感が生じたからではないだろうか。

24 2012年3月27日、小栗一成氏へのインタビューによる。

25 関谷町は旧地名。現在の大阪市浪速区の日本橋から恵美須西にわたる範囲に位置していた。

5. 韓国との交流活動

加藤は朝鮮半島との交流にも関心が深かった。『履歴書』には、1952年に「日韓親和会」の創立に関わったとあるが、ここで日韓親和会について見ていきたい。日韓親和会は1952年6月28日に、下村宏、渋谷敬三、太田為吉、丸山鶴吉、船田享二を発起人とし、鈴木一が理事長となって発足した。1966年10月24日に外務大臣の許可を得て、社団法人に改組。1953年11月から雑誌『親和』を毎月発行し、1967年4月からは韓国語講座を開講、1968年からは韓国料理教室を常設するなど、日韓親善友好を目標としてきた団体とされる。財政難により1977年11月をもって25年の歴史を閉じることになるが、解散にあたって理事長の鈴木一が回顧録を残している²⁶。

雑誌『親和』の目次一覧を見ると加藤以外にも金素雲や柳宗悦、湯浅克衛のような文学者、趙澤元のような韓国を代表する舞踊家などによる朝鮮文化に関する記事も少なからず含まれており、当時としては画期的な内容であったといえる。日本人だけでなく、朝鮮人も多数参加していたことや、日本人側にしても朝鮮に実際に住んでいた人たちが原稿を書いていたのは、朝鮮半島との国交がなかった当時としては、植民地期に朝鮮に住んだことのある人の見解が貴重であったためであろう。

しかし、日韓親和会は単なる交流を目指した民間の団体ではなく、その設立には、朝鮮戦争と日韓会談の開催という時代的背景を抜きにして考えられない²⁷。会を創設した鈴木一という人物はもともと宮内庁の侍従次長であったが、1950年10月1日に外務省出入国管理庁の最初の責任者となった。出入国管理庁は朝鮮戦争の難民管理をその主な目的として設立されたが、鈴木自身の「朝鮮のことをあまりにも知らなさすぎる」という反省

26 鈴木一（1978）「日韓親和会二十五年の歩み」『コリア評論』No. 194, pp. 38-46。

27 高山幸（2013-2014）「追放と包摂の社会学—1950年代朝鮮人の在留特別許可をめぐる」『アジア太平洋研究センター年報』

から、この会を発足させたという。日韓親和会は単なる文化団体ではなく、設立当初から政府高官や政治家とのつながりの深い団体であったのである。加藤が『親和』に寄稿した記事は、挿絵のほかに短い論考などもある。加藤は日韓親和会の創立に関わったとあるものの、加藤が書き残した記事を検討すると、創立の中心にいたというわけではなく創立当初から関係があったというにすぎないようだ²⁸。

とはいえ、日韓親和会での活動をはじめ、加藤が政府レベルの日韓交流事業に関わることがあったことは注目しておくべきだ。加藤は1963年に、日本敗戦後はじめて韓国に正式に招待された日本人となった。これは建国15年目の光復節の記念式典への招待であり、その時に日本から招待されたのは加藤と文筆家の小田実、日韓関係の親善の仕事をしてきたという老紳士S氏、つまり鈴木一の三人であった²⁹。小田実の回顧によると、1963年の7月末に突然、大韓民国広報部から電話がきて記念式典への出席を要請されたということなので、かなり急に韓国行きが決まったようだ。

この時の人選がどのようになされたかという点、小田実自ら選ばれた理由を、代表作『なんでも見てやろう』の海賊版翻訳本が韓国でも人気を博していたからだと推測しており、加藤は還暦を記念して出版した『朝鮮の美しさ』が当局の目に留まったことがきっかけとなったのだと考えている。鈴木は日韓親和会で活動しているにもかかわらず一度も韓国の地を踏んだことがないことに同情した駐日韓国大使が招いてくれたのだと語っている。

このときの招待について、小田実は一六・五軍事クーデターの後に、国家再建最高会議議長となった朴正熙が日韓会談を念頭において、民間人を招待して友好ムードを高めておこうとしたのだらうと語っているが³⁰、加

28 加藤松林人 (1962)「親和会と私」『親和』100号、p. 28。

29 小田実 (1963)「韓国・なんでも見てやろう」『中央公論』11月号、p. 62；鈴木一 (1963)「まぶたの韓国訪問記」『親和』118号、pp. 2-22。

30 小田実 (1996)『われ=われの旅』岩波書店、p. 7。

藤はこの韓国行きを思わぬ幸運ととらえたようであった。記念式典参加の後、小田も加藤も一ヶ月ほど韓国内を自由に旅行することが許されたという。国交正常化を前にして破格の待遇といえるだろう。このときの踏査については1973年発行の『韓国の美しさ』で一部紹介されている。国賓であるため、ホテルは1963年4月に開館したばかりのウォーカーヒルが指定されるなど、格別の配慮をうけたようだ。政府の招待でソウル以外に光州、釜山、蔚山、仏国寺、大邱などを旅行したとある。ソウルでは昔住んでいた家を訪ねて、現在の主の厚意で一晩をそこで過ごしたという³¹。

この時の記念式典については、日本以外の国の招待客はアメリカのUPI通信の支局長、パリ・マッチの記者、インドネシアの新聞社主だったそうだが³²、人選の基準についてはよくわからない。日本を含む外国からの招待客がこの6名だけだとすると、そのうちの一人に加えられた加藤の位置もかなり特別なものだったといえるだろう。このような特別待遇を受けることになったのは、加藤が日韓親和会の活動に関わっていたことと無関係ではないだろう。

日韓親和会は先述したように、朝鮮戦争の難民に対応する官庁の責任者に任命された鈴木一が、朝鮮のことを学ぶために発足させた団体だが、具体的には第一回日韓会談の日本側主席代表である松本俊一のための激励懇談会の席で民間親和団体設立のための四人を選出したことから始まった³³。つまり、日韓親和会は日韓国交正常化を念頭においた活動をしていたといえてよい。朝鮮美術展覧会の審査員を務めたという権威と日韓親和会に属しているという実績を見れば、加藤は招待する側からしても、望ましい人物であったに違いない。一方、加藤本人は政府から招待されたことに対して感謝はするけれども、とりたてて権威に迎合したり自慢したりするよう

31 加藤松林人 (1973)『韓国の美しさ』WUM 学園出版部、pp. 162-163。

32 小田、前掲記事、p. 61。

33 鈴木の記録によると1951年12月のことである。鈴木一 (1978)「日韓親和会二十五年の歩み」『コリア評論』no. 194、p. 39。

なことはなく、淡々としていたようだ。

日韓間の交流でいえば、日韓の美術関係者をつなげる努力もしている。1962年7月には日本南画院、同人有志、また朝鮮に縁故のある有志作家の参加を得て、「日韓美術連絡協議会」を作ったとある。これは、戦後、漸く往来が出来はじめた韓国画家との連絡をはかるためのものだったというが、この時、会に参加した画家については現段階でははっきりしたことはわからない。さらなる調査が必要だろう。

また、加藤は日本民芸協会の依頼により、韓国民芸協会との連絡、打ち合わせのために1964年に訪韓したとある³⁴。これは1963年の訪韓の折、日本民芸館の田中豊太郎から「かの国の民芸はいまどうなっているだろうか（中略）誰か適当な人があったら、その調査や蒐集を依頼してほしい」と頼まれたことがきっかけになっている。その結果、1964年1月ソウルの点一百貨店社長李完錫によって韓国民芸品研究所が設立され、韓国での韓国人による民芸蒐集活動が始まった。1964年の訪韓時にはその活動状況の視察と、東京で作品を展示即売する場合の打ち合わせをしている³⁵。これが一過性のものだったのか、ある程度持続したのかについてははっきりしないものの、日本人である加藤の呼びかけに答えようとする韓国人がいたという事実が、戦後の韓国においても加藤がそれなりの重みをもって迎えられたことを示している。

加藤は訪韓前、日本民芸館で田中豊太郎に会った帰りに、当時日本民芸館に住んでいた浅川巧夫人に訪韓の挨拶をしたところ、ついではあれば浅川の墓を見てきてほしいと夫人から頼まれている。その言葉をうけて、忘憂里の山中に浅川の墓を探し出して修理をほどこし、慰霊祭まで行っている³⁶。

34 履歴書には5月とあるが、『韓国の美しさ』によると1964年6月2日から6月23日まで。途中1週間ほど済州島踏査。

35 加藤、『韓国の美しさ』p. 176。

36 加藤、『韓国の美しさ』pp. 179-180。

このような1960年代の加藤の活動からは、高齢にもかかわらず彼が日本と韓国とをふたたび結びつける役割を果たそうとしていたことがみとれる。その後、1965年には日韓の国交が正常化し、1973年には二冊目の画文集『韓国の美しさ』を刊行しているが、これは既刊の『朝鮮の美しさ』に戦後の訪韓時における見聞録をつけくわえたものである。

6. 結 論

以上、加藤松林人の自筆履歴書をもとに、彼の画業ならびに画業以外の諸活動、さらには戦後の韓国との交流活動について見てきた。加藤はたいへんにまめな人で、例を見ないくらい詳細な記録を残している。先述したように、この履歴書以外にも四百枚を超える自筆原稿『回想の半島画壇』が存在する。これについては現在、整理中であるが、加藤の眼を通してみた朝鮮画壇や朝鮮美術展覧会について、あるいは日朝の美術家同士の交流について書かれており、このうえなく貴重な資料となっている。

今回、『履歴書』を検討してみて改めて認識したのは、加藤は決して「忘れられた画家」ではなく、晩年においても旺盛な活動を展開していたということであった。また、その人脈の広さにも驚かされる。彼は人とのつながりを大切にし、高齢になってもさまざまなことを計画し実行しようと努力していたといえる。当然、植民地宗主国側の人間という限界はあったものの、朝鮮のすばらしさや美しさを伝えることは、とりわけ晩年の加藤にとってはひとつの使命のようなものとなっていたようだ。

本稿では触れるのみにとどまった『回想の半島画壇』についても、本格的に精査する必要があることはいうまでもない。加藤画伯のご遺族は、2012年の段階では『回想の半島画壇』全体の活字化は望んでおられないということであった。しかしながら、金殷鎬や李象範らをはじめとする朝鮮の画家たちとの交流など、学術的にきわめて重要な内容が含まれているため、今後なんらかの形で検討できればと考えている。

図版リスト

1. 自筆履歷書
2. 加藤松林人
3. 『朝鮮の美しさ』表紙
4. 大東昌可(『近代徳島的美術家列伝』より転載)
5. 加藤松林人〈秋江揺落〉〈冬の夕暮れ〉
6. 『韓国の美しさ』表紙
7. 加藤松林人〈黒扇〉
8. 『ボトナム』表紙
9. 加藤松林人〈卓上静物〉
10. 加藤松林人〈秋の関帝廟〉
11. 金殷鎬〈春郊〉
12. 加藤松林人〈秋山騎旅〉

参考文献

新聞

『新世界新聞』

『京城日報』

図録

『朝鮮美術展覽会図録』

徳島県立近代美術館(2000)『近代徳島的美術家列伝 明治から第二次世界大戦まで』

福岡アジア美術館(2014)『東京・ソウル・台北・長春 官展にみる近代美術』

神奈川県立近代美術館葉山(2015)『日韓近代美術家のまなざしー「朝鮮」で描く』

朝鮮語資料

강민기(2004)「近代轉換期 韓國画壇의 日本画유입과 수용-1870년대에서 1920년대까지」홍익대학교 대학원 미술사학과 박사학위논문；

——(2007)「근대 전환기 한국화단에의 日本画 유입과 한국화가들의 일본체험；1890년대부터 1910년대까지」『美術史学研究』253집；

——(2014)「근대 한일화가들의 교류」『한국근현대미술사학』vol. 27。

기다에미코(2010)「재조선 일본인 화가에 대한 편견을 지우자」『플랫폼』1.2월호 pp. 50-53

김주영(2000)「일제시대 재조선 일본인 화가연구-조선미술전람회 입선작가를 중심으로」서울대학교 대학원 미술사학과 석사논문；

——「재조선 일본인 화가와 식민지 화단의 관계 고찰」(2002)『美術史学研究』233-234집；

李龜烈(1992)「1910년 전후기에 내한했던 일본인화가들」『근대 한국미술사의 연

구』미진사 ;
황빛나 (2012) 「재조선 일본인 화가 구보다 덴난 (久保田天南) 과 朝鮮南画院」 『美術史論壇』 34 집.

日本語資料

- 小田実 (1963) 「韓国・なんでも見てやろう」 『中央公論』 11 月号、p. 62
—— (1996) 『われ=われの旅』 岩波書店、p. 7
加藤松林人 (1962) 「親和会と私」 『親和』 100 号、p. 28。
—— (1973) 『韓国の美しさ』 WUM 学園出版部、pp. 162-163。
金子一夫 (2013) 「大正・昭和戦前期全国中等学校図画教員の総覧的研究 (3) : 東京府内私立中学校」 『茨城大学教育学部紀要』 茨城大学教育学部、2013 年
姜健栄 (2009) 『近代朝鮮の絵画 日韓欧米の画家による』 朱鳥社 ;
喜多恵美子 (2010) 「朝鮮美術展覧会と朝鮮における「美術」受容」 『帝国と美術』、
国書刊行会
金炫淑 (2015) 「古代への憧憬と朝鮮風俗画の復興」 『日韓近代美術家のまなざし—
「朝鮮」で描く』
産経新聞社 (2013) 『新聞記者司馬遼太郎』 文春文庫、pp. 3-33。
鈴木一 (1963) 「まぶたの韓国訪問記」 『親和』 118 号、pp. 2-22。
—— (1978) 「日韓親和会二十五年の歩み」 『コリア評論』 No. 194、pp. 38-46。
辻 (川瀬) 千春 (2016) 「植民地期朝鮮における創作版画の展開 (2) —京城における日本人の活動と「朝鮮創作版画会」の顛末—」 『名古屋大学博物館報告』 No. 31、
p. 32。
安森敏隆、上田博編 (2008) 『ポトナムの歌人』 晃洋書房、pp. 1-3
(大谷大学准教授 韓国・朝鮮美術)

〈キーワード〉 朝鮮美術展覧会、東洋画、日韓親和会

